

聖マタイによる福音書第17章1～9節
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

聖書の物語を主題として絵を描くことは、いつの時代から始められたのでしょうか。わたしたちも数多くの名画に接する機会があります。それらの名画に聖書のみ言葉を配して、1冊の本としている書物に『アート・バイブル』というのがあります。手に取ってご覧になったことのある方も多いことと思います。それぞれの絵の作者たちが、聖書の物語をどのように解釈して表現しているかという点に思いを巡らしながら見てみますと、大変、興味深く名画を鑑賞することができると思います。

今日の福音書は、イエスさまのお姿が山の上で白く輝いた物語ですが、この場面をテーマにした作品は、沢山あると思います。それらの中から、『アート・バイブル』にはラファエロの「キリストの変容」という作品が載せられています。この作品の特徴は、絵の上の半分には変容の場面が描かれており、下の半分には悪霊に取り憑かれた男の子を癒してもらうために、父親が弟子たちの所に連れて来た場面が描かれていることです。

「キリストの変容」を主題とした作品は、殆どが白く輝くイエスさまのお姿を中心に、その両脇にモーセとエリヤを配し、輝く光に恐れおののく3人の弟子たちが倒れている姿でもって、場面が構成されています。ところがラファエロは、その場面は作品の上半分に描いて、下には変容物語の続きの別の物語を置いています。2つの場面を1枚の絵の中に収めているわけですが、2つの物語は、それぞれ独立した別々のものではなくて、深く関係していると解釈して表現しているように思えます。

山の上でイエスさまお姿が変わるという神秘的な出来事が終わった後、イエスさまとペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人の弟子は山を下りて日常生活に戻って行きます。山の麓にいた群衆のもとに行くと、ある人が、自分の息子を憐れんで下さいとイエスさまに哀願します。それは息子が癲癇のためにひどく苦しんで、火の中や水の

中にたびたび倒れ込んでしまうからです。弟子たちに治してもらおうと連れて来ましたができませんでした、と訴えるのです。

ラファエロの絵の下半分では、画面右側の父親が目を大きく見開いて弟子たちを見つめています。母親ともう1人の女性、これは姉でしょうか、その2人も跪いて息子を指差して弟子たちに真剣な眼差しを向けています。後ろにいる群衆も一緒になって何とかして下さいと訴えているようです。息子は硬直した体を父親に支えられて右手を天に向け、唸り声を上げている様子です。

左側の弟子たちは息子の姿に驚き、戸惑いの表情を浮かべ、難しい顔をして何事かを話し合ったり、後ろの方では自分たちには無理だと諦めて目を伏せている弟子もいます。手前の弟子は聖書でしょうか、本を広げてはいますが、息子を見て、打つ手はないと言わんばかりです。赤い服を着た弟子とその隣にいる弟子が手を伸ばして山の上のイエスさまを指し示しています。それによって山の上の光り輝く出来事と、麓の悪霊に取り憑かれて苦しむ人間の現実とが結びつけられているのです。

イエスさまの変容は、ご復活のイエスさまのお姿の先取りであるとか、世の終わりの日に栄光に輝いて再び来られるイエスさまの先触れだとか解釈されます。その通りでしょう。しかしラファエロは、復活のお姿を垣間見せて下さった出来事は、この世界の闇の部分と無関係に起こったのではない。むしろ人間の暗闇の現実の中にこそ、イエスさまの栄光は輝くのだと解釈して、このような構図を思い描いたのではないのでしょうか。

イエスさまのお姿が白く輝いた時に、モーセとエリヤが現れてイエスさまと語り合っていたとあります。モーセは律法を代表する人物です。エリヤは預言者の代表者として登場しています。今日の旧約日課にあったように、モーセはシナイ山で神さまの栄光に触れ、主の呼びかけを聞きました(出エジプト記24:16)。エリヤはホレブの山で主が自分の前を通り過ぎて行かれるのを経験しました(列王記19:11)。2人とも、神さまの顕現を体験し声聞いたのですから、イエスさまの変容の場面

に立ち会うのに最も相応しい者として、一緒に現れたのです。しかし、この2人の登場によって、イエスさまの栄光の姿だけが強調されているわけではありません。

モーセは、エジプトの奴隷であったイスラエルの民を解放するために、神さまから選ばれ遣わされました。そして、難しい交渉の結果、脱出に成功し、40年の荒野の放浪の旅を続けました。その間に、何度もイスラエルの民から裏切られ、最後にはヨルダン川を目の前にして、対岸のネボ山の上から約束の地を望み見て、そこで生涯を終えるのです。約束の地に入ることは赦されませんでした。乳と蜜が流れると言われた豊かな地を楽しむことなく、苦勞を背負った生涯を終えることになるのです。

何故でしょうか。イスラエルの民は、シンの荒野で飲み水に欠乏した時に、モーセに詰め寄って水を要求しました。モーセは「彼らは今にも、わたしを石で打ち殺そうとしています」と主に向かって叫んでいます。主のみ言葉に従ってモーセは杖で岩を打ち、民に飲み水を与えました。そのことによって主を試みたこと責任を問われたのです(出エジプト記17:1～、民数記20:2～、申命記32:51)。

これは、わたしには、極めて厳しいことのように思われます。旧約聖書の該当する箇所を読んでも、モーセの振る舞いは果たして責任を問われるようなことなのかと疑問に思います。しかし、主のみ言葉は、「あなたたちはわたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なることを示さなかった」と言っています(民数記20:12)。主の目にはモーセが徹底して主を信頼し委ねきっているとは映らなかったのかも知れません。

エリヤもイスラエルの民の裏切りに遭いました。主を礼拝する祭壇を破壊され、仲間の預言者たちは剣によって皆殺しにされました。エリヤもまた命を狙われて一人、逃げ出してホレブの山に向かいます。イエスさまは、人々はエリヤのことを「好きにあしらった」と言っていますが、イスラエルの民はエリヤの告げる神さまの御言葉を聞こうとはしなかったのです。神のみ言葉に従って生きるのではなく、自分の望むことを欲するままに行おうとして、預言者を邪魔者だとして殺害しようとしたのです。

疲れ果てたエリヤは、預言者としての使命に生きることの厳しさに耐えかねて、「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。わたしは先祖にまさる者ではありません」と任務から解放されることを願います。しかし、ホレブの山で主の顕現に出会ったエリヤは、「行け、あなたの来た道を引き返しなさい」という静かにささやく主のみ言葉を聞きます。そして命を奪われるかもしれない危険な道を務めを果たすために、再び戻って行くのです。

自分の才能や能力とか知恵の限界を遥に超えた、実行することが不可能と思われるような課題を目の前にして、自分にはとても務まらない、そこから逃げ出したいと思うことは自然の感情です。神さまに選ばれ、その使命を果たすために遣わされる者が歩もうとする道は、決して安楽な道ではありません。これは、聖書に登場する人物だけに与えられた道ではありません。わたしたちも同じ道を歩むのです。洗礼をうけるということは、悩みもなく恐れもなく、平安な生涯を保証されることではありません。むしろ逆です。新たな困難な問題を背負い込むことです。自分では何とも解決の行かない問題に直面して、ただおろおろすることしかできないとしても、或いは、その前に倒れ伏してしまったとしても、そこに留まって苦しみを共有する生き方へと自分を捧げることです。

イエスさまは、変容の出来事の直前と、悪霊に取り付かれた男の子を癒された直後に、2度にわたってご自分の死と復活の予告をされています。そして、「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と弟子たちを招いています。これは、人間の悲惨な現実を目を塞いで、そこから逃れて、只ひたすら天国への階段を上って行き、神さまの栄光にあずかりなさいという招きではないことは明らかであると思えます。

この後、イエスさまが進んで行かれた道の先に待っていたのは、苦難と辱めでした。十字架への道でした。モーセやエリヤと同じように、人間の目からすれば、幸せとはとても言うことのできない悲惨な出来事を、最後まで引き受ける歩みでした。それは、もう駄目だと諦めと絶望しか残されていないような状態にある人間に、新たな希望を与えるためです。復活の命にあずからせるためです。真つ暗闇の中で

こそ復活の光は輝くのです。それはイエスさまに起こった出来事です。そしてわたしたちにも起こる出来事です。その力にあずかって、わたしたちも変容させていただくのです。神さまの祝福は、わたしたちが何もかも上手く行って幸せ一杯というところにあるのではなくて、暗闇の中にこそ、そこに輝くともしびとして顕わにされるのです。

イエスさまの栄光に輝く姿を目の当たりにし、雲の中から「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が聞こえた時、3人の弟子たちは恐れあまり倒れ伏してしまいました。その弟子たちにイエスさまは近づき、手を触れて「起きなさい、恐れることはない」と言って起こされました。ご自分は高い所に留まっていて、弱い弟子たちを叱咤激励して「立て」と、大声で怒鳴り立てるのではありません。親しく近づいて、自ら身を屈めて触れてくださり、手を取って立ち上がらせてくださるのです。

イエスさまが苦難の道を歩まれたのは、そのようにして「あなたも立つことができる」と言ってくださるためです。わたしたちがどんな困難な状況にあったとしても、希望に生きる者としてくださるためです。そのようなイエスさまの歩みを、父なる神さまは、「わたしの心に適う」と言って、それが父なる神さまの御心でもあることを明らかにしてくださったのです。

今週の水曜日から迎える大齋節の間、この神さまの御心を思いめぐらしながら、祈りと黙想の生活を過ごして参りたいと思います。